

柚子忌

山田真砂年

白波の消ゆる間もなし柚子の忌
柚子忌のけふ夏雲の耀けり

園児らのマスクすぐずれ柿の花
葉から葉へ躊躇ひもなき毛虫かな
余りもの食うて土用の一日過ぐ
月見草揺れて小暗き御師の宿
地上には空あり蚯蚓よぢれをり
鎌倉や蛇の出さうな五月闇

紫陽花のいぢわるさうや隣家に咲く

合歓の木に風を待ちをる夏帽子
昼顔の寄る辺の笹を強く抱く
万緑を抜け出す坂を登りけり
むしむしと粟の花散る昨夜の雨
百段を上り下りして夏鶯

落口の余すことなき梅雨の滝

苔の花路傍の石のみな仏

未央柳誰も守らぬ信号機

床板を鳴らす素足や梅雨晴間

茫々と海あり梅雨の結願寺

実桜や鳥の聞きなし二つ三つ

梅雨葺下枝（しづえ）に落し物のタオル
枝しならせモリアオガエルの卵揺れ
ぎしげしこ音して夏草の踏まれ
流木は鯨の骨のごと涼し
レーダーに万緑の陸現れり